

# 英知通信

発行  
英知大学  
兵庫県尼崎市若王寺  
2-18-1 (〒661)  
TEL (06) 491 - 5083  
編集  
英知大学広報室

1984. 3. 31

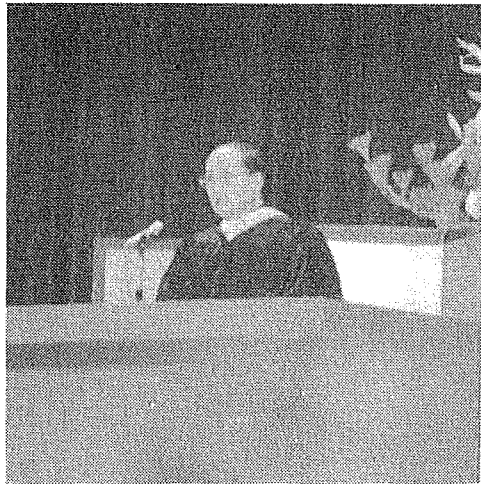
UNIVERSITAS SAPIENTIAE

No.39

## 卒業式式辞

### 「地の塩、世の光」

学長 傘木 澄男



本日ここに、ご来賓各位並びに卒業生のご父兄の方々をお迎えし、第十八回英知大学卒業証書授与式を挙行いたしますことは、私のこの上ない喜びであります。卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。ご父兄の皆様にも心からお祝いを申し上げます。私は今、卒業生の皆さん一人ひとりのこれからの幸せを心から願い、祈る者の一人として、ここに「幸福なる人生」ということについて所感を申し述べて、皆さんへのはなむけの言葉といたしたいと思っております。

幸福とは何かをめぐって昔から思索がなされ、様々の幸福論が説かれてきたのは皆さんもご存知のところだと思います。アリストテレスは「人間の究極目的たる最高善は幸福であり、それは人間が人間らしく立派に生きることである」と言っており、快楽や名誉や財産などに幸福が存するのではないことを明らかにしています。「満足した愚者であるよりも不満足なソクラテスである方がよい」という言葉も、幸福には質的な差異があることを言おうとしています。ところで、キリスト教の立場から人間の幸福を根本的に考えてみますと、それは決してきれいな事柄の幸福論ではありません。

なぜなら原罪と罪の重荷のもとにある私たち人間の弱い惨めな本性と、それが救い主キリストのわざによつていやされたという救いの真理を見逃すことはできないからです。幸福は究極的には神の救いの恵みです。聖アウグスチヌスは「あなたの家に住み、常にあなたを賞め賛える人は幸い」とあるように、神への賛美の内に人間の最高の幸福があるのだ」と説いています。このように人間のいわば絶対的な幸福は、救い主キリストによる神の教えを聞くことから始まり、神への賛美の生活の内から完成されるものであります。私たちはこのような幸福を最高の理想として、自分の人生の目標である幸福についての考え方を常に吟味し、高めていかなければならないと思うのです。

ところで何をすることも素質というものがあるように、幸福な人になるためにも素質が必要で、恵まれた環境にあつても幸せな人はいない、恵まれた環境にありながら不幸をかこつ人もいます。それは幸福の本質的な条件が内的なものであるからです。内に幸福を味わう能力、その素質を持つ人はいわばかけがえのない最高のタレントを持つている人と言えます。皆さんは本学で勉強され、先生方や友だちからの良き感化といろく貴重な経験を通して、この幸福の素質を身につけられたことと思います。幸福というものは、世間通用している処方箋に従わねばならない何か決まったものなのではありませぬ。自分自身の幸福の形を発見したならば、それがたとえ世間一般の目には不幸と見えても、あくまでも自分の幸福を追求していく心構えを持つことが大切です。そういう賢明さと勇氣と、何よりも自分の生き方に対する責任感というものが人間の価値を決める大切なものではないでしょうか。

にもとづく欲求であり、幸福は人生の目的なのです。しかし幸福とは何か、いかにして得られるのか、ということになりまして、もはや自明のこととして、あらためて人は考えることをしませぬ。一般には心身の健康、経済的な余裕そして自由な生活が送れたら、それが人間の幸福であると考えられていますが、しかし果たしてそれだけで幸福は保証されるのでしょうか。私は皆さんに、人間の本当の幸せは何なのか、そして幸せな人になるために必要なものは何か、これを社会人としての出発点においてまじめに考えていただきたいのです。

幸福とは何かをめぐって昔から思索がなされ、様々の幸福論が説かれてきたのは皆さんもご存知のところだと思います。アリストテレスは「人間の究極目的たる最高善は幸福であり、それは人間が人間らしく立派に生きることである」と言っており、快楽や名誉や財産などに幸福が存するのではないことを明らかにしています。「満足した愚者であるよりも不満足なソクラテスである方がよい」という言葉も、幸福には質的な差異があることを言おうとしています。ところで、キリスト教の立場から人間の幸福を根本的に考えてみますと、それは決してきれいな事柄の幸福論ではありません。

ここで私は皆さんに、幸福について考えることは決して利己主義ではないという点を付け加えたいのです。自分の幸せのことなど考えているのは自分勝手ではないか、などと言ったり、また実際に自分の幸せを粗末に扱うかのような行動に走る人がいますが、これは大きな誤りです。幸福であるかないかは私たちの自由ではなく、幸福は私たちの義務なのです。愛とは本質的に他者の幸せを願うことです。それならばまず自分が幸せであることの内には愛はその最も深い存在の根拠を持つはずで、自分がないものを人に与えることはできません。自分が燃えているなら、周りの人を温めることができます。自分が幸福であつて始めて人にその幸福を分かち与えることができるのです。キリストは「あなたの隣人を自分のように愛しなさい」(マタイ22の39)と言われまして、先ず自分を愛し、そして人を愛する。これはエゴイズムではなくて、まさに愛の基本的な在り方です。憂鬱な顔一つが全体の空気を陰気にしますが、晴ればれとした顔が一つあれば皆が喜びと平和に包まれます。これはまず自分が幸福であること、喜びを持つことが隣人に対する愛の第一の務めであるということの身近かな例と言えます。私は皆さんが幸せな人になり、皆さんの力によつてより皆さんが幸せによつて家庭を、世の中を、明るい幸せな家庭に、世の中に変えていかれるようにと願わずにはおれません。

近年お酒を飲む人が女性の間にも急激に増えて、四万に近い女性がそのために治療を要する状態にあると云われます。何が原因でこうなるの

でしょうか。「これといった不満はないのに、なぜか不安でたまらないし」、「私は一体誰であるのかわらなくなってしまう」、「私の一生はこれだけなのか」。このように自分に自信が持てなくなった女性がが増えていくようです。子育てが終っても、平均寿命までまだ三、四十年間、いわば母でも妻でもない一人の人間としての長い年月を心の空白のまま生きていかねばならないというのは大変な試練に違いありません。生き方の基礎が、幸福の土台が出来ていなかったために、生活は豊かでも、幸福から遠去かかってしまうのではないのでしょうか。

また青年たちについても、似たような状況があります。総理府青少年対策本部という所が公表した最近の「世界青年意識調査」の結果によりまずと、対象となった十一の先進国の青年たちには自己中心主義・自分中心の人生観が今日共通の傾向として認められますが、日本の青年の特徴は満足度の低さ、不満の高さであると同時に、不満がある時にそれを積極的に解決しようという意欲が弱いということが分りました。青年の特徴はまさに、現状に満足せず、改革への意欲を燃やすことであります。このような自己中心主義・消極的態度・社会的無関心の傾向は本当に憂うべきことです。

しかし、このような青年の状態は社会の反映にすぎません。今の社会は青年にとつて夢を持ってない世の中となつていくようです。皆さんはわが国のめざましい経済発展の結果実現したこの豊かな社会に生まれ、育ち、青春を享受して来られました。しかし僅か二、三十年の繁栄の経験から永い将来を占うことはできません。人生の盛りが早く過ぎ去るよう、国の繁栄も長続きしないことは

歴史の証明するところですが、この国の将来に陰がさすときが来るとすれば、その直接の原因がすでに今の社会の中に、人々の生活の中に沢山あることを私たちははつきりと見る事ができます。必ずやつてくる窮乏と混乱、試練の時に備えて、私たちに最も必要なものは何か。それは、どんな状態においても幸福を見いだし、築いていくことのできる、しっかりとした幸福についての考え方と素質ではないのでしょうか。

皆さんはカトリック大学である本学において教育を受け、本学の掲げるキリスト教との出会いを各人各様の形と深さにおいて持たれました。それは根本的にどういう事だったのでしょうか。それは「私たち人間は生まれたままの本性とその弱さ、その欲望の枠の中に閉じ込められたままではない。その枠と制約を突破して人間のあるべき姿、即ち神の似姿として人間の尊厳性という理想に向かつて絶え間なく成長していつてはじめて、本当に成熟した、幸福な人間になれるのだ」ということ、これをただの理屈としてだけではなく、生活の根本的態度として捉えていることをあります。私は皆さんがそれを本学で身につけられたと信じます。そしてそれこそ皆さんにとつて、今日手にされた卒業証書にもまして貴重な成果であるということと皆さんに自覚して欲しいと思うのです。先

程、聖書の中のキリストのことがば朗読されました。あなた方は地の塩である。あなた方は世の光である。皆さんはこれから英知大学の卒業生として、塩のように世の中を清めてその腐敗を防ぎ、良き味をつけていく人になりますように、そしてまた、暗闇を追い払う光のように世の中に明るい希望を吹き込んでいく人にな

りますように、どうか精進していつて頂きたいのであります。

皆さんは今日を限り、卒業を終えられませんが、決して勉強を、勉学を終えられるのではありません。皆さんの本当の勉強は実はこれからなのです。今日は卒業式であると同時に、皆さんの生涯にわたる勉学と人間形成のいわば新しい課程の始業式なのです。どうか皆さん、本学で学んだこと、考えたこと、体験を通して身につけたことを卒業後も忘れず、それを良き土台として自分自身のしっかりとした価値観・人生観をもつて、あらゆることに当つていつて下さい。そして、どうか「神のおられる家庭」をつくり、「神に向かう人生」を築いていつて下さい。

終りに聖書からパウロの言葉を引用して、皆さんにお捧げしたいと思います。「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どのような場合にも感謝しなさい。これこそ神がキリスト・イエスと一致しているあなたたちに望んでおられる生き方なのです」(一テサ一の一六―一八)。喜びと祈りと感謝のある幸いなる人生を神が皆さん一人ひとり

お与え下さいますようにと心から祈りまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

同窓会会長福原宏章氏祝辞(要旨)  
大学を出ても勉強は終わりではない。これからは本当の勉強だ。毎日最低二時間は明日に備えて勉強をする習慣をつけること。勉強という字は勉めを強いると書くように、勉強は決して楽な道ではなく、汗をかき苦ししい思いをしてやるものだ。一日のうち数ページでも書物を読むこと。人生は一瞬々々が勝負だ。柔和に生き

### 新しい決意を胸に

昭和五十八年度卒業式

彼岸とはいえまだ肌寒さの残る三月二十一日の午前十時から本学講堂で第十八回卒業式が挙行され、神学科七名、英語英文学科百八名、西語西文学科四十三名、仏語仏文学科三十名の合計百八十八名が社会人として巣立つていつた。式はまずメルオ教授の電子オルガン演奏によつて始まり、傘木学長から卒業生一人ひとりに卒業証書が授与された。学長式辞(別掲)のあと、来賓の同窓会会長福原宏章氏から先輩として心のこもつた激励の言葉(別掲)が述べられた。次いで在学生代表からクラブ活動において熱心な指導を受けたことや、人との出合いの喜びを教わつたことについての感謝の言葉が述べ



べられ、卒業生代表は先生方から学んだ恩は終生忘れない、これからは英知で学んだことを生かして国家社会に役立たせることを誓います、と述べた。式終了後クラス別の記念撮影があり、振り袖姿の華やかさの中で卒業生は互いに別れを惜しみながらそれぞれ新たな生活へ向つて力強くスタートした。この日午後四時から大阪梅田のタリーミナルホテルで全学科合同の謝恩会が開かれた。なお今年度の学科賞の受賞者は次の通りである。

- |          |          |
|----------|----------|
| 神学科      | マリアン・ヘルス |
|          | ・ガトン・ゴメス |
| 英語英文学科   | 神崎 敏明    |
|          | 森本 雄二    |
|          | 溝端千雅子    |
|          | 後藤 早苗    |
|          | 加藤 弘美    |
| 西語西文学科   | 上岡すが子    |
| 仏語仏文学科   | 武重 由紀    |
| イスパニア大使賞 | 寺岡 義晴    |

# 日本のカトリック大学

## 図書館間相互協力実る

現在、日本全国には、同じカトリックを建学の精神とする大学が、既に十一ある。藤女子大学（札幌）清泉女子大学（東京）、聖心女子大学（同）、白百合女子大学（同）、上智大学（同）、南山大学（名古屋）、ノートルダム女子大学（京都）、英知大学（大阪）、神戸海星女子大学（神戸）、ノートルダム清心女子大学（岡山）、エリザベト音楽大学（広島）、より成る日本カトリック大学連盟では、その総会において、相互の結びつきを強化し、それを現実にも実りあるものとする為に、二年前から加盟大学図書館間の相互協力を具体化しようとする話し合いが為され、昭和五十九年度四月より、共通閲覧証の発行が実現することになった。現代文明の発達と学問研究の進歩に伴い、研究者には他大学図書館資料の閲覧への二ードが高まり、合せて大学図書館自体も、日毎に増大する図書館資料や情報の収集に限界を知るようになった。為に、開かれた図書館としての性格が再認識されるようになり、図書館の機能面としての資料の提供及び利用に重点が置かれるようになってきた。他方大学図書館での分担保存も叫ばれている。然し、この相互利用及び相互協力も、現実には各大学共、それぞれ独自の建学の精神をもち、各大学の置かれた状況も異なるために、その徹底的な協力態勢は、それ程易しいものではない。この様な状況にあつて、カトリック大学図書館同士が相互の信頼に基づき、自館の資料の全面的な提供について合意に達したことは画期的なことである。各自の大学図書館で発行される

共通閲覧証により、他のカトリック大学の図書館が自分の大学の図書館のように閲覧利用出来るという便利さだけでなく、英知大学図書館の資料に加えて更に他の十大学の図書館の資料が利用に供され、今までは比べる事の出来な程の豊かな情報を得る事になったわけである。英南戦等で既に親密な友好関係にある南山大学の図書館では、図書館資料の貸出しも可能である。また、相互利用及び相互協力を更に促進する為に日本カトリック大学図書館相互協力協議会（仮称）として正式に発足する運びになっている。カトリック大学の学生・教職員・研究者が、表面的な友好関係だけではなく、教育と学問研究という核心的分野においても相互協力により兄弟的結びつきを深める事は、実に喜ばしいことである。それと共に、英知大学図書館も、カトリック大学の図書館としての自覚を新たにし、キリスト教関係の図書資料の収集・提供にも、今迄以上に意を用いなければならぬことを再認識している。

### 図書館の書庫拡充

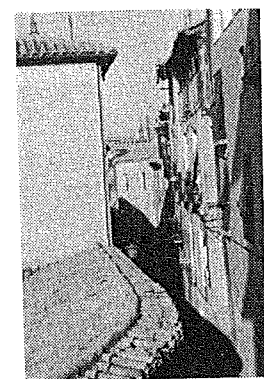
英知大学図書館は、現在和洋書合せて約八万余の蔵書冊数を数え、三層ある書庫も手狭になつてきた。図書館新築の当初から書庫として計画されていたが、今まで会議室やレセプションの部屋として使われていたチャペル横の部屋が新たにこの三月に書庫として整備された。利用者の便宜を考え、実際の排架は夏休み始めとなる予定。（中野正勝図書館長）

### クラーク・合唱団、本学で公演

本学の姉妹校アメリカのローラス大学と同じダビューク市にあるカトリック大学クラーク大学の学生たちからなるクラーク・ローラス合唱団のコンサートが一月十日、本学の学生会館で開かれた。合唱団の一行三十人は、これまでヨーロッパやインドへ演奏旅行し、各地で高い評価を受けている。今年も京都、東京公演のために来日したもので、宗教音楽をはじめアメリカン・フォーク、ポップス、黒人霊歌、ミュージカル等が美しいハーモニーで披露され、つめかけた教職員や学生約二百人を魅了した。コンサート終了後、学生会館一階のロビーで合唱団員と英知大学学生との交歓会が催され、本学の学生たちには日頃養なつてきた語学力を活用する絶好の機会となつた。双方の学生たちは、立食パーティーの

## ヨーロッパ研修旅行で得たもの

すつかり定着した学生の海外研修旅行だが、今年度は去る二月二十四日に英語英文学科の谷真嗣先生の引率で八人がイギリスへ、西語西文学科の山口忠志先生の付き添いでスペインへ八人、アメリカ組は三月二日に国際交流委員長の松本信愛先生と英語英文学科の井田規文先生の同行で三十人が出発したが、それぞれ約三週間の日程を終えて全員無事帰国した。



「イギリス組は『イギリスの文学・歴史の旅』をテーマに文学の故里を約二週間にわたって訪ねた。学生たちは建物や遺跡などを、これまでは活字や写真等、書物によつて学んでいるにすぎなかったが、今回の旅行で実際にそこを訪れて自分の目で確かめているという実感を得たこと、また別の感じ方をした。四年次になって新しい専門科目を履習した時、あらためて実感としての効果が期待できるはずである」（谷先生談話から）

「スペイン組の二週間のホームステイは、それぞれの家庭に学生一人ずつの宿泊だったため、会話のあまり得意でない学生も食事時などフア

## 視聴覚教室の増設完成

本学ではこれまで視聴覚教室はL1教室一つだけであつたが、学生数も増加して手狭になつてきたため、視聴覚教室の増設が求められていた。この度新年度に間に合わせるように二番目のL1教室を新設することに決定し、工事は順調に進んで、春休み中に完成の予定である。教室棟の西端の二階が従来のL1教室であつたが、新しいL1教室はその五階に同じくその三階と四階が二つの視聴覚教室となる。新しいL1教室は六十五のブース、冷暖房装置を備えたものである。二つの視聴覚教室は一般の授業にも使われるが、暗幕、スクリーン、映写機、スライドプロジェクター、OHプロジェクター等が備えつけられ、冷暖房装置も施され

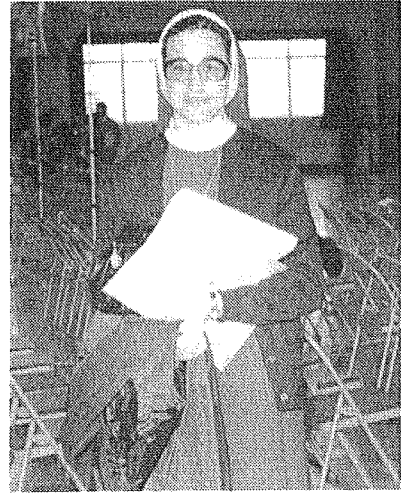
ミリーと話し合うチャンスに多く恵まれて、会話力の向上に大へん役立つた。ホームステイの間は午前中四時間を語学学校で受講し、午後は近くの遺跡見学などして過し、残りの三日間はグラナダ、セビリア、コルドバへ旅行した。旅行中、マドリッド郊外で英知の学生ら五、六人と出会つたり大へん楽しい旅であつた。一般の観光旅行の場合は日常会話としてのチャンスはあまりないのだが、今回のように現地でもファミリーにとけこんで家族の一員となつて生活することで、スペインの文化や歴史をよく知ることが出来るし、また会話力の向上でも大きな意義がある。語学学校では学生一人ひとりに出席証明書、成績評価書の二通が手渡されたが、今回の旅行では何よりも学生たち自身、今後スペインを研究していく上でも大いに自信がついたようで、一層やる気を起して帰国したようである」（山口先生談話から）

ていて、手軽に視聴覚教育のために利用することができる。これら視聴覚教育の新設に要した費用は約三千

# 「助けられ、 支えられて…」

アンヘレス・ガトン

(昭和58年度生  
神学卒業)



二百万円であった。これによって本の新年度からの語学教育には一層の発展が期待されている。

時の流れは速く、日本に来て七年間が過ぎようとしています。そのうちの四年間を英知大学の学生として過ごすことができました。この生活を終える今、不思議だという思いと同時に、感謝の気持ちでいっぱいです。出会う人ごとに、「シスター、もう卒業ですか。よくやりましたね」と言ってくださいますが、そのたびに「自分がやったことではない」と強く感じます。いつも助けがあったからできたことでした。

内容があまり理解できなかったり、レポートのために本を読もうと思っても、一冊の本を読むのに一カ月もかかったり、書こうと思っても言葉が出てこなかったりして、何度も、「もう、ついでにいけないなあ」と感じていたことを思い出します。そして、必ず助けが与えられたことも。試験の時には、「自分の言葉で書いてもいいですよ」と言ってくださいたり、「シスター、わかりませんか。こんな本を読んでみたらよくわかりますよ」と教えてくださったり、参考になるからと言ってコピーをくださったり、先生方をはじめ回りの人たちの助けによって一つ一つ乗り越えられたものです。そして、この大変な二年間は日本語の理解が進んだだけでなく、日本のことをもっと知ることができた大切な機会となりました。それは、いろいろな学科のたくさんの学生たちの中で、一緒に勉強しながら、日本の学生の動き、反応、考え方などにふれることができ

たからです。きっとこれからの仕事の上でも、このことは大きな助けとなってくれるでしょう。あとの二年間は、大学の雰囲気にもすつかり慣れ、少人数グループでの専門教料は落着いて楽しく勉強してきました。気がついたらもう卒業でした。助けられ、守られて「卒業させられる。追い出される」という気持ちです。日本の大学がそうなのか、英知大学独特のものなのかわかりませんが、先生と学生とのかわりには特別なものがあると感じました。先生方は学生一人一人のことを心配し、見守り、勉強のことだけでなく、いろいろな面がかかわろうとしてくださいます。まして指導を求めれば、必ず応えてくださいます。そして学生は、ただ見守られているだけでなく、期待されているのです。この期待に何か応えようとしているうちに四年間があつたという間に過ぎました。また、日本の学生たちは、自分たちのおかれている社会の状況や問題にあまり関心がないように見えますが、一方では、勉強しようと思えば、落着いて勉強に専念できる環境に恵まれていると言えそうです。この平和で恵まれた環境を与えられている若者たちが、四年間の学生生活を無駄に過ごさないようにと願っています。最後にになりましたが、忍耐をもって励まし、支え、助けてくださいました先生方、友人たちに心から感謝致します。ありがとうございました。

## 昭和五十九年度入学試験

昭和五十九年度の一般入学試験は例年になく寒波の訪れも和らいだ二月十四日の午前十時から外国語、論文、国語の三科目が実施された。昨年度と比べて受験者総数は増加した

ものの、英語英文学科がいく分減少したが、これは前年度の競争倍率があがった反動とみられる。西語西文学科、仏語仏文学科は共に二十%増加した。学内のどの試験会場にも真剣さの中に「喜びの春」の訪れを祈る面持ちが満ちていた。合格発表は二月二十四日の早朝、学内に掲示され、同時に受験生全員にも郵便で通知された。また推薦入学試験は十二月一日から三日間、英語と現代国語、面接試験が実施され、百三十二人がひと足早い春を迎えた。

## 研究室だより

- 研究発表
  - 石野好一講師(仏語仏文学科)「接続詞or-の意味記述と使用分析をめぐって」
  - 日本フランス語研究会 昭和58年6月11日 出版
  - 中野正勝助教(神学科)は神学博士論文「Eine Suche nach dem japanischen Verständnis der (Offenbarungs-) Trinität」を天理時報社からドイツ語原文で出版、ローマ教皇庁立ウルバノ大学より神学博士の正式称号を取得した。
  - 石野好一講師(仏語仏文学科) フランス語意味論 Argumentationと接続詞 海外言語学情報第2号(大修館書店) 昭和58年12月1日発行
  - 沼野元義講師(教養課程)「臨床教育心理学」(共著) 創元社(三四四頁、二、〇〇〇円)
  - 「ジンバルド」現代心理学 全三巻(共訳) サイエンス社(七二七頁、各二、八〇〇円)
  - 英知大学論叢「サビエンチア」第十八号掲載の研究論文

- K・ライマン教授
  - Erfahrungen zur Sprach- und Gedankenwelt Karol Wojtylas (Johannes Paul II.) - im Blick auf seine Wirksamkeit als Schauspieler, Dramatiker und Dichter -
  - 西山俊彦教授
    - 「事実」の諸相と成立過程 - 社会的立論への予備考察(2) -
  - 奥村和滋講師
    - 人格形成における愛と権威 - 典型・伝統・出会いの価値論的考察 -
  - 岸 英司教授
    - 聖トマス・アクイナスにおけるキリストの受難について
  - G・ペーキ教授
    - Das chinesische Weltbild - Ein Beitrag zum ost-westlichen Dialog -
  - 和田幹男教授
    - イザヤ52:13-53:12の批判的研究
  - 中野正勝助教
    - 神のペルソナに関する一省察
  - 井上博嗣教授
    - Francis Macomber における自己実現
  - J・バーガー講師
    - The Poetry of Wallace Stevens: Poetic Techniques to Serve the Poet's Vision
  - 芝垣哲夫講師
    - 言語起源論 - 歴史的課題 -
  - 井田規文講師
    - O'Neill's "Electra": A Self-destructive, yet Glorious Human Dignity
  - J・L・マルバレス教授
    - Vista del castillo de Osaka hace cuatro siglos
  - G・テスカンフレール講師
    - アンドレ・ジイドと「狭き門」
  - 蔵本邦夫非常勤講師
    - 森 鷗外比較文学研究